

1. 2. 5 音楽科

原口 直

1. 研究主題

「音楽を生活や社会と関わらせて考え、表現できる生徒の育成」

2. 研究主題について

本校の研究テーマである「世田谷中学校で育てる『21世紀型能力』－各教科で支える力と3つの学習形態」において、音楽科では「音楽を生活や社会と関わらせて考え、表現できる生徒の育成」に焦点を当てた。

「21世紀型能力」の提案の中で、音楽科が育む力は主に下の3点であると考えた。

- ①中核となる思考力
- ②それを支える基礎力
- ③使い方を方向づける実践力

②基礎力は日々の授業や中学校以前から培ってきた表現のために必要な能力である。すでにもっている基礎力の中から何をどう使うか考えたり、能力の不足があった場合どのように補うのか考えたりするのが①思考力であり、それを実際に活用することが③実践力となる。これらの3つの力は関わりあっている。

さらに、令和3年度から完全実施される新たな学習指導要領で求められている力をより強固なものにしようと考え、「生活や社会と関わらせ」ることをより意識した指導内容を検討した。これまでには年間のうち、いくつかの授業に色濃く「生活や社会との関わり」を持たせた授業を開発した程度に留まっていたが、年間を通じて多くの授業において「生活や社会との関わり」を持たせられるよう配慮した。この結果、授業そのものが改善されたり、同じ教材でも授業内容に変わったりした。

「生活や社会との関わり」を考えることによって、「なぜ音楽を学ぶのか」の問いに明確な答えをもてるようになった。例えば、ベートーヴェンを聴いて、作曲家の生涯や音楽の仕組みを知って、感想を書いて終わりであった授業を「生活や社会と関わり」を考えるために、もう一歩「音楽を支える企業について考える」という踏み込んだ落としどころを作った。これにより、音楽家を育てるのではなく、音楽に関心や理解のある企業に勤める社会人を育てることに切り替えられ、生徒の実情に合う指導ができることになったと言える。

他の授業の例でも一歩踏み込むことで、生徒が学ぶ意味（＝教員が教える意味）がより明確になったと言える。

教材	従来の授業内容	「生活や社会と関わる」プラス1
花は咲く 他	鑑賞→曲の特徴を捉える→分析	+ 社会における音楽の役割と共通の特徴
文楽	鑑賞→歴史・人形の仕組み→感想	+ 税金が文楽を支える助成金になる
交響曲第5番ハ短調	鑑賞→作曲家・音楽の仕組み→分析	+ オーケストラやホールを支える企業
FLASH、SUN他	鑑賞→曲の歴史・特徴→分析	+ 自分の嗜好を明らかにする
世界の諸民族の音楽、日本の芸能	鑑賞→曲の歴史・特徴→分析	+ 英語で説明する
歌舞伎、ライブ他	鑑賞→曲の歴史・特徴→分析	+ ライブ市場の拡大、チケット転売

3. 授業展開の例

実践①

『交響曲第5番ハ短調』（ベートーヴェン作曲）

「コンサートのチケットが手に入りました。どのような準備をしていきますか？」

コンサートに行く時に作曲者や時代背景などの②基礎力を培うだけでなく、曲の構成や形式を①思考することでより深く鑑賞ができるようにする。

【生活や社会との関わり】

企業や財団などが芸術文化を支える社会体制を知り、生活の中で音楽鑑賞をする文化を知る。

実践②

『日本の郷土芸能』『世界の諸民族の音楽』（エイサー、阿波踊り、ウズンハウ、京劇など）

「外国の方に『日本の音楽を教えてほしい』と言われたら何と説明しますか？」

音楽の特徴をつかむだけでなく、他人に説明する事を前提として比較したり、言葉を選んだりする。

【生活や社会との関わり】

国際社会において我が国の文化を説明したり、世界の音楽についての知識や理解を深めたりする。

実践③

『文楽「菅原伝授手習鑑」より』

「鑑賞した後、大阪市が文楽協会への補助金廃止を提案したことについて知り、文楽の存続を考える。」

芸能の特徴を知った上で、芸能をつなげる難しさや意義と地方財政とを結び付けて考える。

【生活や社会との関わり】

芸術文化を支える国や地方自治体で起きている問題を知る。生活の中で文楽を鑑賞しなければ関係のない事でなく、納めている税金がどのように使われているのか関心を持つ。

実践④

『願いごとの持ち腐れ』（AKB48）他

「AKB48は、いくらもらっているのか？」

CDを販売するために関わる様々な職種の人々の働きを知った上で、その生活を守ることを考える。

【生活や社会との関わり】

音楽制作に携わる人々を守る上で欠かせない著作権に触れ、現在起きている問題やこれから起こりうる問題を考える。

実践⑤

『Arashi Blast in Miyagi』（嵐）、『LIVEGENIC』（安室奈美恵）、FUJI ROCK FESTIVAL2018

『CATS』『弱虫ペダル』『髑髏城の七人』『エリザベート』『バカリズムライブ「なにかとなにか」』

「ステージ」の魅力を知り、音楽の楽しみ方の多様化やこれに伴う課題について考える。

【生活や社会との関わり】

音楽の楽しみ方でCD・DVDの売上は右肩下がりである一方、ライブ・エンタテインメント市場規模は2015年に音楽ソフトを抜いて、過去最高を記録している。ステージの魅力を知るとともに、限られたチケットを巡っておこる問題（チケットの高額転売や対策）について考える。

4. 公開授業における提案

かねてより問題視していた『音楽の選び取り方の変化』について、生徒と自分自身が考え直す機会を作るため、広く音楽に精通している矢野利裕先生をお迎えして、音楽の嗜好について深く学んだ。

第3学年 音楽科学習指導案

日 時 平成 30年6月16日（土）第2校時
対 象 第3学年C組40名（男子20名 女子20名）
授業者 東京学芸大学附属世田谷中学校
音楽科教諭 原口 直
hnao0728@u-gakugei.ac.jp
場 所 本校2号館2階 音楽室

1 題材名 音楽の聴き方を知り、好きな音楽を選び取ろう

2 題材の目標

音楽のもつ特性を聞き取り、根拠を持って説明する。
自らの音楽の嗜好性を理解し、これからの生活に活かす。

3 学習指導要領との関連

【B鑑賞 指導事項】

ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠を持って批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと

【配慮事項】

(7)イ 生徒が音や音楽と生活や社会とのかかわりを実感できるような指導を工夫すること。

〔共通事項〕 (1) ア「音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成」

次期学習指導要領

「音楽的な見方・考え方を働かせて、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す」

4 題材の評価規準

	〈観点1〉 音楽への関心・意欲・態度	〈観点4〉 鑑賞の能力
題材の評価規準	音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わり、音楽の特徴とその背景となる文化・歴史や他の芸術との関連、我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴、音楽の多様性などに関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりを理解する。 音楽の特徴をその背景となる文化と関連付けて理解する。
具体的評価規準 学習活動における	音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりに関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりを理解して、解釈したり価値を考えたりし、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴いている

5 指導観

(1) 題材観

本題材は、学習指導要領の鑑賞の指導事項ア「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠を持って批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと」を達成するための題材である。本題材における目的は我が国の音楽文化を支える生活や社会との結びつきを感じ、音楽の魅力を確かにする鑑賞をする。

昨今「音楽を選び取る」方法が変化している。特定のCDをCDショップに足を運んで買いに行く時代から、定額制音楽配信サービス等で怒涛のように無情に押し寄せる数百万曲の中から『お気に入り』を見つけ、以降の選曲をAIに任せる時代である。だからこそ、音楽の特質を聴き取り、選び取る力をつけ、根拠を持って批評できる能力が重要になるとを考えた。

(2) 生徒観

入学時に行う好きな曲・アーティストの発表では、クラシックから洋楽、J-POP、ボカロなど多くの音楽が並んだ。選曲の理由として、音楽だけでなく容姿や人気、親や友達の影響といった音楽以外の背景が関わっているように思える。

また、音楽の視聴方法として、昨年度3年生に行った授業で好きな曲を持ってくるよう指示した際に、CDを持ってくるのは学級に数名程度に留まり、携帯音楽端末(iPodなど)やYouTubeといった動画サイトのオンラインでの視聴が圧倒的に多かった。音楽をデジタルで扱うのが当たり前になっていると見受けられる。携帯電話等を保護者から買い与えられている生徒にとって月額が必要な定額制音楽配信サービスを使っている生徒は少ないが、今後彼らがサービスを使って音楽を獲得する可能性は充分にある。

(3) 教材観

教指導助言者の批評家・音楽ライターの矢野利裕氏*の監修のもと、選曲をおこなった。選曲に際し、今年度入学生の好きな曲・アーティストの一覧を提示した。各音楽ジャンルにおいて、導入となる4曲とさらにジャンルのルーツや特徴が色濃く表れている深堀りの3曲が選曲された。

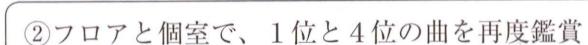
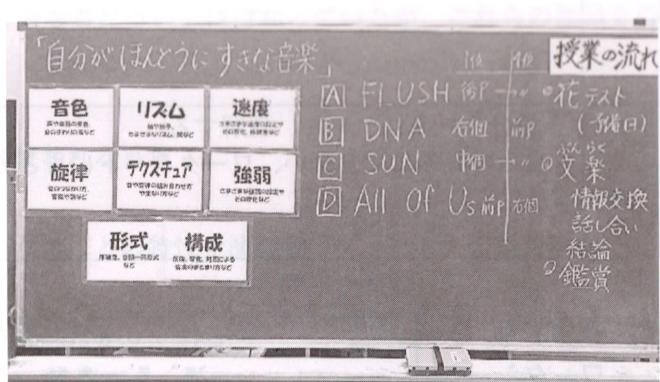
音楽ジャンル	導入	深堀り
テクノ/ テクノポップ	Perfume 「FLASH」	Daft Punk 「One More Time」 The Buggles 「ラジオスターの悲劇」 Kraftwerk 「The Robots」
ヒップホップ/ ラップ	防弾少年団 「DNA」	Snoop Dog 「So many pros」 Kendric Lamar 「Bitch, Don't kill my vibe」 Funky4+1 「That's The Joint」
ソウル	星野源 「SUN」	Maroon 5 「Sugar」 Michael Jackson 「Off the Wall」 Ray Charles 「Hit The Road Jack」
ロック/ サイケ	GLIM SPANKY 「All Of Us」	ゆらゆら帝国 「ゆらゆら帝国で考え中」 My Bloody Valentine 「Only Shallow」 The Beatles 「Sgt.Pepper's Lonely Hearts Club Band」

* 矢野利裕氏…1983年、東京都生まれ。批評家、ライター、DJ、東京学芸大学大学院修士課程修了。2014年「自分ならざる者を精一杯に生きる－町田康論」で第57回群像新人文学賞評論部門優秀作受賞。共著に、大谷能生・速水健朗・矢野利裕『ジャニ研!』(原書房)、宇佐美毅・千田洋幸編『村上春樹と二十一世紀』(おうふう)、単著に、『SMAPは終わらない 国民的グループが乗り越える「社会のしがらみ」』(垣内出版)、『ジャニーズと日本』(講談社現代新書)などがある。

6 題材の指導計画と評価計画（全2時間扱い）

時	◆ねらい ○学習内容 ・学習活動	具体的評価規準 (評価方法)
◆音楽の聴き方を知り、好きな音楽を選び取ろう		
1	<ul style="list-style-type: none"> ○授業の目的を知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・時代を反映し、音楽を自ら選び取っていくことの重要性を知る。 ○導入の4曲を鑑賞する。〔写真①〕 <ul style="list-style-type: none"> ・音楽ジャンルの異なる曲を聴き、1～4位の順位をつける。 ○最も気に入った曲と最も気に入らなかった曲を、根拠を持って批評する。〔写真②〕 <ul style="list-style-type: none"> ・場所に分かれて、曲を再度聴く。その際、〔共通事項〕に注目して詳しく聴く。 ○再度、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・詳しく聴いた上で、1～4位の順位を付け直す。 	関心をもった鑑賞 (見取り、ワークシート) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 1位をつけた曲の人数 (男/女) A 『FLASH』 4人 (1/3) B 『DNA』 8人 (5/3) C 『SUN』 11人 (2/9) D 『All Of Us』 15人 (10/5) </div>
2 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ○自らが好んだ音楽を、詳しく知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・1位に選んだ曲と同じジャンルの曲を聴く。 ○好みを明らかにし、確固たるものにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・同じ好みをもつ／他の好みをもつ同級生と、音楽のよさを共有する。 ○根拠をもった好みについて理解する。 <ul style="list-style-type: none"> ・まとめとして、自ら好みに向き合う。 	多角的な観点、結論 (発言、ワークシート)

<第1時の様子>



7 本時（第2時／全2時間中）

(1)本時のねらい

音楽をより深く聴いて好みを理解し、根拠をもって選ぶ基礎にする。

(2)本時の展開

時	○学習内容・学習活動	指導上の留意点	具体的評価規準（評価方法）
導入 10	○復習 ・強弱・テクスチュアを学んだ『花』を歌う。	〔共通事項〕の学んだことを復習する。	・歌唱の関心意欲態度（見取り）
展開 35	○音楽ジャンルを再確認する。 ・導入4曲を途中まで聴き、1位にした曲を確認する。 ○1位の曲と同じジャンルで異なる曲（深堀りの曲）を聴く。 ・場所を分かれて、指定された3曲を鑑賞する。 ○よさを味わい、グループで共有する。 ・なぜ曲がよいと思うのか、〔共通事項〕の言葉を使ってグループで共有する。 ○ちがった好みのグループにプレゼンテーションする。 ・鑑賞したジャンルのよさを、根拠をもって説明する。	・4つのジャンルを並行して聴き、比較しやすくする。 ・巡回しながら、反応を見る。 ・〔共通事項〕の言葉の意味を必要に応じて解説する。 ・批判にならないよう、気をつけさせる。	・鑑賞（ワークシート） ・議論に対する関心意欲態度（話し合い、ワークシート、プレゼンテーション、話を聞く態度）
まとめ 5	○自分の好みについて、理解する。 ・自らの好みに向き合い、ワークシートにまとめる。	・自分に向き合いで、今後の選曲に有効な技能を確認する。	・鑑賞の振り返り（ワークシート）

8 使用する ワークシート

左 第1時
右 第2時

3年音楽科		平成30年6月7日	
		3年 組 品 氏名 _____	
学習内容 「自分がほんとうに好きな音楽」を選び取ろう。			
1.			
NO		3.	
A			
B			
C			
D			
2.			
	音色		
	リズム		
	速度		
	旋律		
	テクスチュア		
	強弱		
	形式・構成		
3. 前回1位に選んだ曲× = ジャンル【 】			
4. 最も大事な3つの要素（音色・リズム・速度・旋律・テクスチュア・強弱・形式/構成）			
曲名一 要素 1			
5. (音色・リズム・速度・旋律・テクスチュア・強弱・形式/構成)			

（指導案は以上）

5. 結果と課題

【公開研究会】

公開研究会では22名の参観者があった。大学院生から現職の教員、出版社など様々な立場で音楽に関わる参観者であったが、扱った教材がいわゆる西洋音楽ではなく、教科書に載っているポピュラー音楽でもなかつたため、教材そのものの認知度が低かった。音楽ジャンルの区分の理解も不十分であった。そのため、研究協議会の途中では教材として使用した下記の曲を参観者で聴くという場面もあった。

音楽ジャンル	導入	深堀り
テクノ/ テクノポップ	Perfume 「FLASH」	Daft Punk 「One More Time」 The Buggles 「ラジオスターの悲劇」 Kraftwerk 「The Robots」
ヒップホップ/ ラップ	防弾少年団「DNA」	Snoop Dog 「So many pros」 Kendric Lamar 「Bitch, Don't kill my vibe」 Funky4+1 「That's The Joint」
ソウル	星野源「SUN」	Maroon 5 「Sugar」 Michael Jackson 「Off the Wall」 Ray Charles 「Hit The Road Jack」
ロック/ サイケ	GLIM SPANKY 「All Of Us」	ゆらゆら帝国 「ゆらゆら帝国で考え中」 My Bloody Valentine 「Only Shallow」 The Beatles 「Sgt.Pepper's Lonely Hearts Club Band」

授業者はこれらの音楽ジャンルの区分や曲、演奏者についてほぼ知っていたが、これらの知識を得たのは学校という場ではない。

- ・クラブのような音楽イベント
- ・音楽CDを販売する店での棚や曲紹介文に使われる言葉
- ・音楽雑誌で使われる言葉
- ・ライブハウスでのジャンル分け（ライブハウスごとの特性や演奏者のブッキングの指向）
- ・音楽に詳しい先輩からの紹介

などの、教員より前（大学生～社会人）に得た知識ばかりである。

教員にこのような知識を求めるることは難しい。なぜなら、教員は基本的に西洋音楽の畠で育ってきたからである。学習指導要領の改正により、和楽器を新しく知ったり習ったりする教員は増えたが、教科書でも扱いの少ないポピュラー音楽を積極的に知ろうとする人は少ない。

矢野利裕先生の講評で、刺さった言葉の「扉を開けば、無限に拡げられる」。生徒に向けての言葉であったが、無限に聞く音楽の扉を開かなければならぬのは教員なのかもしれない。生徒は放っておいても次々に開けていく音楽の扉は、教員にはなかなか重い。意識的に扉を探し、力を入れて開け、扉の中に入していくことが求められる。

【年度】

「生活や社会との関わり」を意識した授業の展開について、これまで年度に1つの授業を特別に作り上げていた印象であったが、全学年・全授業に意識を広げることで多くの授業が活きてきた。また、それらが結びついていく印象があった。行事の中の合唱といった枠組みを変えにくい内容であっても、授業者が常に「生活や社会との関わり」を念頭に置くことで、発問や声かけ、目標の持ち方が変えられる可能性がある。

公開研究会を特に力を入れて新たなことに取り組む場として位置づけた上で、意識的に年度を通じて研究に向き合いたい。

(文責 原口 直)